62

性科学雑誌「體性」の編集方針の変遷と寄稿者に関する考察

杉田　聡[1)]，田中　誠二[2)]，丸井　英二[3)]

[1)] 大分大学医学部看護学科，[2)] 新潟大学人文社会・教育科学系，[3)] 人間総合科学大学

【研究の背景】

「體性」は大正10年（1921年）に土肥慶藏の編集により（財団法人）日本性病予防協会から発刊された性科学の総合雑誌である．本雑誌はその後，財団会頭で編集者である土肥の死去や時局の趨勢により編集方針や雑誌名が変わり，現代では（公益財団法人）性の健康医学財団発刊の「性の健康」に受け継がれている．本発表では，「體性」の編集方針の変遷と寄稿者に関する考察を行う．

【雑誌名と編集方針の変遷】

雑誌名は，大正10年から昭和22年（1921–1947年）までが「體性」，昭和23年から昭和41年（1948–1966年）までが「性病」，昭和42年から昭和58年（1967–1983年）までが「VD」，昭和59年から平成9年（1984–1997年）までが「STD」，平成12年から平成19年まで（2000–2007年）までが「性と健康」，平成20年から現在（2008年から現在）までが「性の健康」と変遷してきた．

「體性」は土肥慶藏（1866–1931）（東京帝国大学医学部皮膚科教授）により大正10年（1921年）12月1日に創刊された．土肥は皮膚科において梅毒やハンセン病の研究するほか泌尿器科の発展にも寄与し，（財団法人）日本性病予防協会の初代会頭を務めた．土肥は創刊の辞で「茲に本誌を發行して，社會各級の人士をして本病に關する理解を得せしめ，且つ醫師に對して日新の療法を紹介すると同時に，性的生理學 Sexualbiologie 性的社會學 Sexualsociologie の兩方面より廣く男女の體性を研究して健全なる國家の確立と，社會人類の繁榮とに資する所あらんことを庶幾す.[1)]」（発表者注：ここで本病とあるのは花柳病）と述べ，医師や医学研究者のみならず一般人に対しても年会費3円で頒布した．創刊号（大正10年）の目次を一部抜粋すると，「娼妓の檢黴は寧ろ廢止すべし（島田三郎），人性の脅威（永井潛），黴毒と米國の結婚禁止令（杉田直樹），體性から觀た子孫の運命（賀川哲夫）」といった記事が並び「平易通俗を旨とし專ら民衆を指導する[2)]」編集方針を取っていた．なお，體性とは「からだの性能，うまれつき」といった意味である（大漢和辞典，大修館書店）．

大正14年（1925年）には「一歩を進めて性欲科學を檢索すべく稍々方向を轉回[2)]」することになった．第6巻1号（大正14年）の目次には「性病の根源たる接客業婦の消長（山田弘倫），新驅黴藥としての蒼鉛劑の効果（官野英利）」といった学術的な記事が見られる．

昭和6年（1931年）に土肥が死去すると土肥の後に東大皮膚科教授となった遠山郁三が編集を受け継いだが，「本誌を通俗向きに編輯して民衆の覺醒指導に努め……醫家の實際教育を行い，醫俗の別を立てずにして汎人類的目標を狙って來た[3)]」ものから，「……本誌の内容と態度を一變し，專ら斯學を專門とする實地家の補修機關たらしめ」るものへと編集方針を変えることとなった．第19巻5号の目次には「鼠蹊淋巴肉芽腫症による直腸狭窄（藤田善吾），淋菌性疾患に於ける沈降反應に就いて（宮村馨）」といった学術論文が掲載されている．

體性の寄稿者には，土肥慶藏をはじめ皮膚科泌尿器科の医師のみならず，尾崎行雄，芥川龍之介，後藤新平，吉岡彌生といった各界の著名人も名も見られる．発表においては寄稿者の考察も述べることとする．

1）土肥慶藏：創刊の辞，體性，第1巻第1号（1頁），1921年
2）遠山郁三：第一九巻の發刊に臨みて，體性，第19巻第1号（1頁），1932年
3）賀川哲夫：本誌の使命，體性，第18巻第5号（1頁），1932年